

「犬山焼きの歴史と特徴」

犬山焼

有楽苑では、200 年以上の歴史を持つ犬山焼の茶碗でお茶が提供されている。19 世紀初頭、犬山城主が地元の窯元の設立を支援し、優秀な陶工を呼び寄せたのが始まりである。その後何世紀にもわたって、さまざまな作風や製法が変化しながらも、犬山市の 3 つの窯元では、伝統的な絵柄の茶碗や湯呑み、花瓶などが今も作られている。

初期の犬山焼

犬山市今井地区で初めて陶器が作られたのは、18 世紀半ばから後半にかけてのことである。初代窯元・奥村伝三郎が美濃国（現在の岐阜県南部）で学んだ技法を用いた。奥村の今井焼と呼ばれる陶器は、光沢のある褐色の釉薬で日常使いのための素朴な作品である。1781 年に 3 代目が亡くなるまで、彼の後継者たちが今井焼の窯を維持した。

1810 年、地元の商人・島屋宗九郎（年代不詳）は、陶磁器生産の復興に取り組んだ。彼は、犬山城主の成瀬正壽（1782-1838）に嘆願し、丸山地区での開窯を許可されたのである。これが、現在の犬山焼きの始まりである。

最初の 10 年間の記録はほとんど残っていないが、1817 年に新しい窯元が就任し、1822 年、瀬戸や師段味から技術を持ちこんだ陶工が他地域からやってきたことが分かっている。1831 年までには、この地域の職人によって染付と赤絵が作られるようになった。

これを喜んだ正壽は、1836 年、窯元への資金援助を強化した。その 2 年後に正壽は亡くなったが、後継者の成瀬正住（1812-1857）が、正壽の意志を引き継いだ。そして、後に犬山焼の代表的なデザインになる桜と紅葉を組み合わせた「雲錦」の制作を窯元に依頼した。

犬山では、その後も新しい窯が開かれ、絵付けやデザインに磨きがかかり、隆盛を極めた。しかし、1870 年代初頭の廃藩置県や明治時代（1868-1912）への移行に伴い、生産はストップしてしまう。

近現代犬山焼

この中断を経て、犬山焼の生産はおよそ 10 年後に再開される。1883 年に犬山陶器会社が設立され、多くの同じ職人たちが（ときには同じ窯で）仕事を再開するようになった。1891 年の濃尾地震で窯が大きな被害を受け、会社は解散したが、数人の職人が犬山焼を作り続けた。20 世紀初頭には、一時的に瓦を焼くようになった窯元も多くあった。しかし、20 世紀後半になると、茶の湯の人气が高まり、高級陶磁器が再び注目されるようになった。

犬山では現在も 3 つの窯元、尾関作十郎陶房、後藤陶逸陶苑、大澤久次郎陶苑が、伝統的なデザインの優美な茶碗や花器、湯呑み、風鈴など多くの陶磁器を生産している。複雑な赤絵（赤と緑）のデザインや雲錦のモチーフは、金の装飾や虹色のメタリックの渦、質感のある釉薬が施されており、今でも際立って特徴的である。有楽苑では、様々なデザインの茶碗を販売しているが、窯元ではより幅広い種

類の作品を販売している。